

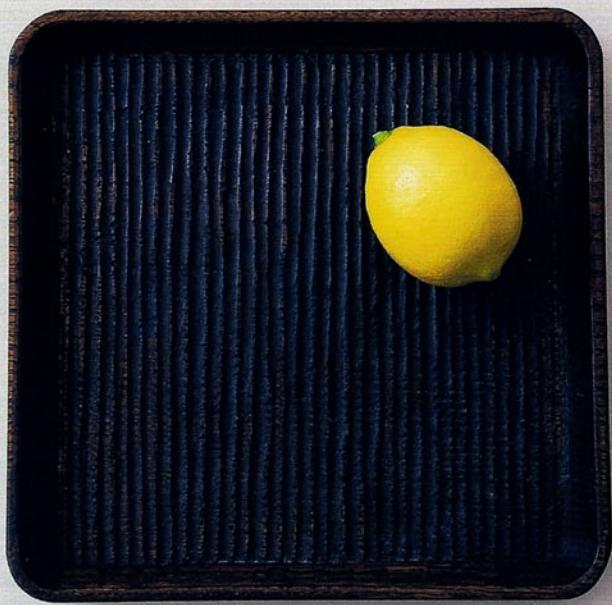
お盆

いまどきの食卓にほどよい素朴さ。

文・赤木智子 エッセイスト

数年前にひょっこりとウチにやつて
来た「我谷盆」。佃眞吾さんの作である。

それまで、(ワガタボン) という名
前を知らなかつたのだから、塗師屋の
おかみさんとしてはお粗末である。そ
もそも「我谷盆」は、江戸時代から石
川県我谷村で作られていたものだそ
うで。その我谷村は、昭和三十三年、ダ
ム建設のために水没してしまつたので、
幻のお盆とも言われているらしい。そ
の古いものも見たことはある。古いも
のは中に彫られた溝もなかなかの堂々
とした太さで、力強い。もちろん古道
具好きの私にとっても、魅力満載の素
朴なもの。だけれども。今のウチの食
卓で使うには、少々荷が重い。テーブ
ルで椅子に座つての、大勢の食事。子
ども若く人もいるのですから、パス
タにパンにスープなんてのもいただき
ます。そんな今時のウチの暮らしの中
で毎日のように使いたい。欲張りな私
は、気に入ったものは、いつでも使い
たいのである。そうそう。同じく石川



県合鹿の「合鹿椀」や、群馬県藤原の「藤原盆」も。オリジナルは、それはそれは、うつとりしてしまうほどの代物だけれど、毎日使うには、手に余る。いつもそばに飾つておくには強すぎる。その点、佃さんの作られたこの今様の「我谷盆」。なかなかのちょうど良さである。軽々しすぎず、重すぎず。あまりに技術的だと、うるさい感じがするものだけれど、それもない。中の溝の幅も、作為的になりすぎずに、うむと納得の彫り加減。お刺身も載せれる。お菓子も並べる。お盆として、プレートとして大活躍である。そのうえ、ウチの台所に收まつて、周りのうつわ達もキリッと引き締まつた気がするからすばらしい。

人間も同じ。この「ちょうどいい感じ」が一番難しいのです。

あかぎ・ともこ ●'62年、東京生まれ。ギャラリー勤務のち、雑誌編集者だった赤木明登さんと結婚。漆職人を目指す夫と共に能登へ移住。「一男二女」の母。ネットで買うことが多いというが、身につけているものもおしゃれ。靴下ひとつにも手を抜かない。

木工家の佃眞吾さんが我谷盆を作り始めたのは6年前のこと。素材に逆らわず、シンプルな道具と技術で作られる素朴さに惹かれた。栗の木を丸いノミ一本で彫つていくのだが、彫るというより無駄などいろを削ぎ落とすような感覚なのだと。棚や器なども製作。写真は赤木さんの私物。25×26cm。2万9400円。
●工房カザ ショップ銀座日々(にちにち)☎03-3573-3417